

# 寺子屋 素読ノ会

日本の偉人のきらきら輝く、千年の叡智。  
名作古典を一冊、生涯の友とする。

2016年11月度より新クラス「葉隠」「申楽談儀」はじまりました。



## 主旨：

数百年読み継がれてきた日本の古典名著を読む“大人の”寺子屋です。  
参加者のみなさんといっしょに名段落を音読。  
『葉隠』『南方録』など世界へも紹介される  
きわめつけの名作を一冊しっかり通して読み、  
その深い意味を知り、長く人生の糧としたい  
と思います。  
古文の読解とともに、その時代の歴史背景や  
日本文化の奥深い世界にも触れていきたいと  
思います。一人ではなかなか読破が難しい古  
典にもう一度チャレンジしてみませんか。

## 実施要綱：

- ①「葉隠」「申楽談儀」「南方録」の3クラス。
- ②月1回、各90分。1作品を読了した時点で終講となります。  
※各作品おおよそ12～24ヶ月予定。開催日は次面スケジュール参照。
- ③サークル代表者：水野聡(HP言の葉庵主宰・能文社代表)
- ④参加費(施設設備使用料・資料等のサークル運営費) 1回 ¥1500  
※参加費は参加当日会場にて徴収します。
- ⑤各コースの指定テキストは各自でご購入の上、参加当日にお持ちください。  
※使用テキストは裏面カリキュラム参照。※当会よりテキストのプリント提供はありません。  
お忘れの場合「素読」できませんのでご注意ください。
- ⑥当会は、古典同好有志による非営利目的・一般公開学習サークルです。どなたでもご自由に参  
加いただけます。初参加の場合、事前に下記宛メール、またはFAXにてご連絡ください。初回参加  
用資料を個別にご用意いたします。当日は、開始5分前までに直接ばる一んの教室までお越しくだ  
さい。教室の番号は当日1階ロビー掲示板でご確認ください。



開講中



開講中



開講中

お問合せ先：寺子屋素読ノ会 代表 水野聡 電話&FAX 044-844-2744

メール/info@nobunsha.jp ホームページ/http://nobunsha.jp

※問合せのメールアドレスはお手数ですが◎印をアットマークに変えて送信してください。



## ■コース

コース	曜日・時間	会場／定員	参加運営費	テキスト	注意事項
A「葉隠」	毎月第2金曜 10:00-11:30	生涯学習センター バルーン (新橋)会議室 ※当日1階ロビー掲示板で教室番号をご確認ください。 定員／各クラス15名	各コース一回 ¥1500	「葉隠」(岩波文庫) 和辻 哲郎(著) 古川 哲史(著) ¥842	
B「申楽談儀」	毎月第2金曜 13:00-14:30			「世阿弥 申楽談儀」岩波文庫 ¥713	
C「南方録」	毎月第2金曜 15:00-16:30			「南方録」岩波文庫 南坊 宗啓 著, 西山 松之助 ¥987	

※日程は下記スケジュール参照

### お知らせ:

- ①2016年11月より「葉隠」「申楽談儀」の新クラスがそれぞれはじまりました。
- ②2016年12月より「南方録」クラスは再スタート。第一章[覚書]のはじめから読み進めます。

## ■2017年度スケジュール: 2016/12/25 更新

年月	2017 1月	2017 2月	2017 3月	2017 4月	2017 5月	2017 6月	2017 7月	2017 8月	2017 9月	2017 10月	2017 11月	2017 12月
A「葉隠」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8
B「申楽談儀」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8
C「南方録」	13	10	10	14	12	9	14	11	8	13	10	8

### ■会場:

新橋 生涯学習センター  
(バルーン)

●JR新橋駅 烏森口より  
徒歩3分  
〒105-0004  
港区新橋3-16-3

※お問い合わせ先は1ページ目をごらんください。



## ■Aクラス「葉隠」寺子屋講座資料より

### ■テーマ：葉隠の“死”とは何か

#### ●葉隠にみる「死」のキーワード

- ・死ぬことと見つけたり
- ・只今の一念
- ・死に狂い
- ・死兵
- ・生死截断
- ・生死を離れる
- ・追腹

#### ●古来の死の表現

「天子の死を崩と曰ひ、諸侯は薨と曰ひ、大夫は卒と曰ひ、士は不禄と曰ひ、庶人は死と曰ふ」『礼記』曲礼篇より

#### ●死の名言

- ・武士道というは、死ぬことと見付けたり（葉隠）
- ・死に至る病とは、絶望のことである。  
（キエルケゴール）
- ・人は死ぬ。だが死は敗北ではない。  
（ヘミングウェイ）
- ・死は人生の終末ではない 生涯の完成である  
（マルティン・ルター）
- ・未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん（論語）

#### ●辞世の句

- ・山崎宗鑑（一五五三没 享年八十九）  
「宗鑑はいづこへと人の問うならば  
ちとようありてあの世へといえ」
- ・千利休（一五九一没 享年六十九）  
「人世七十 力圍希咄（カーッ、トーッ）吾這宝剣  
祖仏と共に殺す 埒ぐる我が得具足の一つ太刀 今  
この時ぞ天に抛」
- ・松尾芭蕉（一六九四没 享年五十）  
「旅に病んで 夢は枯野をかけめぐる」
- ・安藤広重（一八五八没 享年六十一）  
「東路に筆を残して旅の空  
西のみくにの名所を見む」
- ・乞食女（一六七二没 享年不明）  
「ながらえばありつる程の浮世ぞと  
思えば残る言の葉もなし」  
（返歌 新著聞集）  
「言の葉は長し短し身のほどを  
思えば濡るる袖の白妙」

- ・庶民の娘（年代不明 享年二十八）  
（題：湯灌いや）「おのづから心の水の清ければ  
いづれの水に身をや清めん」  
（題：経かたびらいや）「生まれ来て身には一重  
も着ざりけり 浮世の垢をぬぎて帰れば」  
（題：引導いや）「死ぬる身の教えなきとも  
迷うまじ 元来し道をすぐに帰れば」

- ・豊臣秀吉（一五九八没 享年六十三）  
「露と落ち露と消えにし我身かな  
難波の事も夢のまた夢」

- ・徳川家康（一六一六没 享年七十五）  
「嬉しやと二度さめて一眠り  
うき世の夢は暁の空」

- ・浅野内匠守（長矩）（一七〇一没 享年三十五）  
「風さそう花よりも猶我はまた  
春の名残りをいかにとかせん

- ・大石内蔵助（良雄）（一七〇三没 享年四十四）  
「あら楽し思いは晴るる身は捨る  
浮世の外にかかる雲なし」

#### ●葉隠 聞書一 二 武士道というは、死ぬことと見つけたり。

武士道とは、死ぬことと見つけたり。生死分かれ目の場に臨んで、さっさと死ぬ方につくばかりのこと。特に仔細などない。胸すわって進むのだ。うまく行かねば犬死、などとは上方風の打ち上がった武道のこと。生か死かの場面で、うまく行くかどうかなどわかるわけもない。人皆生きる方が好きである。されば、好きな方に理屈をつける。もしうまくいわずに生き残ってしまえば腰抜けだ。この境目が危うい。うまく行かずに死んでしまえば犬死で間違いである。しかれども、恥にはならぬ。これを武道の大丈夫という。毎朝毎夕くり返し何度も死んでみて、常時死に身となって居れば、武道に自由を得、一生落度なく家職も仕果たせるものである。

#### 聞書一 一一四 武士道に於ては死狂ひなり。

一一四 「武士道とは死に狂いすることである。たとえ数十人がかかっても一人の死に狂いする者は殺せないものだ」と直茂公はいった。正気にて大業はならず。気違いとなって、死に狂いするまでだ。また武道を嗜み分別ができれば、すなわち遅れを取るることとなる。忠も孝もいらぬ。武士道においては死に狂いなり。この内に、忠孝はおのづから籠もるものである。

## ■Bクラス「申楽談儀」寺子屋講座資料より

### ■申楽談儀

『申楽談儀』は、世阿弥の芸話を実子、元能(二男ともされる)が長年筆録し、永享二年(一四三〇)元能自らの出家に際して、これらの記録を整理し父世阿弥に贈ったものとされています。

本書は世阿弥自身による著作ではなく、元能による聞き書きです。本来、聞き書き文であれば、段落末が「…となり」、「…と云々」と、三人称で語られるものですが、本書は大半が一人称で書かれ、話者が世阿弥なのか、元能なのか判然としません。また、聞き書きゆえか、用語・字句についても解釈の困難なものが多いとどまらず、それらの解釈をめぐる今日にいたるも盛んに議論が続けられています。

にもかかわらず、本書は『風姿花伝』、『花鏡』とならんで、世阿弥系伝書の代表作とみられ、重んじられていることは間違いありません。その理由は、世阿弥にもっとも近い肉親者による客観的伝聞であること、舞台の実例・具体例が豊富であること、能役者はもとより足利将軍家・朝廷公卿・上級武将から能面作者にいたるまで、様々な歴史的人物の面影を伝えていることなどによるもの。能の“生きた史料”、としての価値の高さによるものといえましょう。

### ■観世元能

世阿弥には子が何人かいたようですが、父から猿楽芸を継いだのは、元雅・元能の兄弟でした。従来、兄が十郎元雅、弟が七郎元能であるとされてきましたが、今日の研究ではどちらが兄かは不明となっています。元雅が、永享四年に没した時、四十歳未満(『却来華』)と推測されることから、兄弟の元能は至徳～応永年間頃の生まれであろうと考えられます。世阿弥出家以前、元能の能役者・作者としての活動は記録されていませんが、世阿弥より『三道』を相伝され、元雅とともに未来を嘱望されていたであろうことは想像に難くありません。しかし、先に述べたように永享二年、能を捨て、若い身ながら出家を決意。六代将軍義教による観世父子への迫害が原因ともいわれますが、その真相は不明です。



申楽談儀  
松井本

### ■申楽談儀 本文現代語訳 序より

#### ・観阿弥

この道の先祖の一人が、観阿である。〈静が舞の能〉、〈嵯峨の大念仏の女物狂の能〉などで、とりわけ名声を得た幽玄至上の芸である、と『風姿花伝』にも見える。

上三花の頂上を極めても道を平らにし、中三位に上っても道を開き、また下三位に下り、塵にも交わった役者は、後にも先にも観阿ただ一人であろう。

〈住吉の遷宮の能〉では、悪尉の面に立烏帽子を着け、鹿杖(かせづえ)にすがって幕を打ち上げて出た。橋掛りでの謡の勢い、ロンギの謡い出し、また、「紀の有常がむすめと頭はすは尉がひがごと」などの文句の詰め開きなどは、他の役者のとても及ばぬものであった。

観阿は大きな男であったが、女の能では細々と見え、〈自然居士〉などで黒頭を着けて高座に座れば、十二、三の少年にも見えた。「それ一代の教法」より、緩急自在に謡い続ける芸に、当時鹿苑院殿は世阿弥に、

「子の汝が親の小股をすくおうとしても、ここはかなうまい」

と御感のあまり軽口を仰ったということだ。いずれの曲であっても曲舞風の謡に変えた芸はもはや神技であった。

また、強々とした鬼の能、〈融の大臣の能〉で、鬼に変じて大臣を襲う場面では、ゆらりと動きだし、きつと止めては大きく見せた。碎動風の鬼では、ほろりと和らげる演技を見せたもの。



## ■Cクラス「南方録」寺子屋講座資料より

### ■千利休

千利休 大永二年(1522) - 天正十九年二月二十八日(1591年4月21日)は中世末期、安土桃山時代の茶人。侘び茶(草庵の茶)の完成者として知られる。父は田中与兵衛(田中與兵衛)、母は宝心妙樹。父の「千」は氏であり、利休の名字は田中である、名は与四郎(與四郎)。のち、法名を宗易(そうえき)、抛筌齋と号した。

広く知られた利休の名は堺の南宗寺の大林宗套から与えられた居士号で正親町天皇の勅許による。この名は『茶経』の作者とされる陸羽にちなんだものとの説がある。茶聖とも称せられる。

和泉の国堺の商家(屋号「魚屋(ととや)」)の生まれ。若年より茶の湯に親しみ、17歳で北向道陳、ついで武野紹鷗に師事し、京都郊外紫野の大徳寺に参禅。織田信長が堺を直轄地としたときに茶頭として召され、のち豊臣秀吉に仕えた。1585年の北野茶会を主催し、一時は秀吉の篤い信任を受けた。この時期、秀吉の正親町天皇への宮中献茶に奉仕し、居士号を許される。また北野大茶会の設営、黄金の茶室の設計などを行う一方、楽茶碗の製作・竹の花入の使用をはじめなど、侘び茶の完成へと向かっていく。いわば茶人としての名声の絶頂にあった利休だが、突然関白秀吉の勘気に触れ、切腹を命じられる。享年七十歳。

結婚は二回。先妻の子と後妻・宗恩の連れ子がそれぞれ堺千家・京千家を起こしたが、利休死去とともに千家は一時衰亡した。堺千家は再興せず、京千家の系譜のみが現在に伝わる。三千家は利休の養子となった宗恩の息子と利休の娘の間の子、利休の孫千宗旦が還俗して家を再興し、その次男・三男・四男がそれぞれ初代として茶道を継承したもので、表千家・裏千家・武者小路千家(別称は官休庵流)の総称である。

利休忌は陽暦(現在の日本の暦)の3月27日および3月28日に大徳寺で行われる。

### ■南坊宗啓

桃山時代の禅僧。『南方録』筆者で利休茶の湯の弟子、堺の集雲庵の二世住持を称した。文禄二年(1593)二月、利休二周忌に香華を手向け立ち去ったという。百年後、立花実山により、博多南坊流の祖として立てられた。

### ■立花実山

1655-1708。明暦~宝永年間の黒田藩士。『南方録』編者。父、立花平左衛門は黒田藩家老で、その次男として生まれる。通称、五郎座衛門、号、宗有・而生齋。八歳で藩主黒田光之に仕える。

茶の湯は、金森候茶堂道可より土屋宗俊に伝わる流れを学び、歌道・書・画をよくした。『南方録』の他、『岐路弁疑』『壺中炉談』など多くの茶書を残した。

### ■南方録

千利休の茶法を伝える秘伝書。古来数多い茶書の中でも、最も重要視されてきた茶道の聖典とよばれる名著である。

利休の高弟、南坊宗啓の聞書で、利休が奥書・印可を加えたという。「覚書」「会」「棚」「書院」「台子」「墨引」「滅後」の七巻より成る。このうち「墨引」までは、利休在世中に成立。「滅後」は利休没後の成立(当然利休の奥書・印可はない)と伝える。

利休没後、著者南坊宗啓自身とともに、その所在は長らく不明となっていた。しかし、元禄三年(1690)筑前福岡侯黒田綱政の家臣、立花実山がこれらを偶然発見、書写・編集したといわれる。

南方録全七巻を三部に分けると、第一部は「覚書」「会」、第二部「棚」「書院」「台子」、第三部が「墨引」「滅後」となる。第一部「覚書」は、利休の茶の伝統的な展開と、利休が創造した新しい茶の哲学、その根本理論を体系立てたものであり、「会」は、利休と著者宗啓が、豊臣秀吉を中心として営まれた茶会を記録したものであるということになっている。しかしこの会の記録は客観的な史料と整合性に乏しく、「利休百会記」をもとに他の茶会記録を付き合わせ、創作したものと推定されている。

第二部の「棚」「書院」「台子」は、利休の茶の詳細な技法の記録である。とりわけ「台子」は、一枚一枚の切紙五十余ものいわゆる切紙伝授を受けたものをまとめて一巻の巻物に仕立て、その全体をさらに利休が印可証明した、ということになっている。

第三部の「墨引」は、第二部の実技に対応して、曲尺割(かねわり)の法則という、「南方録」独特の厳密な茶法実演の美学を詳述したものである。この「墨引」は秘伝についてあまりに詳細に書きすぎることによって師、利休が墨を引いて消した、ということによってこの名がある。よって奥書はあるが印可はない。「滅後」も曲尺割について論じ、その他利休の説いた茶技・茶論を多方面に及んで取り上げている。

### ■南方録の名言

「家はもらぬほど、食事は飢えぬほどにて足る事なり」

「世塵のけがれをすすぐ為の手水ばちなり」

「叶うはよし、叶いたがるはあしし」

「茶の湯の肝要、ただこの三炭三露にあり」

「夏はいかにも涼しきやうに、冬はいかにもあたたかなるやうに」

「小座敷の道具は、よろづたらぬがよし」

「あけ暮外にもとめて、花紅葉が我心にある事をしらず」